



日本の支援で整備されたブンプレック浄水場。約55万人が安全な水を利用できるようになった



ブンプレック浄水場のモニター室では、24時間体制で全システムが管理されている



ブンプレック浄水場の分析室。水質分析を行い、安全な水の提供に努める

浄水場の整備と人材育成で プノンペン市民に 安全な水を供給する

首都プノンペン中心部から車で約30分。喧騒とした都市の雰囲気から一変、道なき道を走っていくと、小さな木造の家々が立ち並ぶ村が見えた。プノンペン郊外のクモンク地区。約1000世帯が暮らす貧困地区だ。

2009年1月中旬、一軒の家の周りに人だかりができていた。そこには、地面を掘り起こし、配水管を設置するプノンペン水道公社の作業員の姿が。住民の一人に聞くと、「この家に水道を引いているんだよ」と教えてくれた。

細長いパイプの先に取り付けられた蛇口をひねると、勢いよく水が流れ出た。家の主人

ニエム・ソフィさんはタクシートの運転手。「長い間、この日を待ちわびていた。本当にうれしい」と笑顔を見せる。その日、村では新たに2世帯に水道が引かれた。

1990年代初頭、カンボジアは長年続いた内戦の影響で、プノンペンをはじめ都市部は荒廃し、特に水道施設の老朽化が深刻だった。復興支援を開始したJICAは、93年にプノンペン市上水整備のための調査を行い、2010年を目標年次とする基本計画と緊急に整備すべき水道施設の改修計画を策定した。それを踏まえて、94年に日本がブンプレック浄水場を改修。続いて、フランス、世界銀行、アジア開発銀行などが、次々に市内の配水管を整備した。

03年に再び拡張されたブンプレック浄水場は、プノンペン駅のすぐそば、水道公社のオ



プノンペン郊外で、配水管の敷設作業を行うプノンペン水道公社の作業員

生命をつなぐ

安全な水を人々に届けよう

20世紀後半、約20年にわたる内戦を経験したカンボジア。

長年の争いによってもたらされた負の遺産は、崩壊した都市の姿であった。

その中で、人々の生活に欠かせない「水」の供給にも壊滅的な被害が及んだ。

しかし今、老朽化していた水道施設が、日本をはじめ国際社会の援助で生まれ変わりつつある。

写真= 今村 健志朗 (フォトグラファー)

フィスに隣接している。目の前に広がる施設は、想像以上に立派なもの。「この15年で、プノンペンの水道事情は劇的に変化した」と話すのは水道公社のエク・ソン・チャン総裁だ。彼は、94年に総裁に就任して以降、力強いリーダーシップで水道公社の再建を図ってきた。「これも、JICAという頼もしいパートナーの協力のおかげです」。国際社会の支援により水道施設が増加するのに伴い、今度はそれを運用する人材の育成が求められる。そこで、JICAは03、06年に、北九州市水道局、横浜市水道局の協力を得て「水道事業人材育成プロジェクト」(フェーズ1)を実施。水道公社職員が施設を適切に維持管理できるよう、技術指導を行った。

チーフアドバイザーを務めた山本敬子・JICA国際協力専門員は、「水道公社の職員は、



Phnom Penh水道公社のチャン総裁。Phnom Penh水道事業の功績が認められ、2006年にアジアのノーベル賞として知られる「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞した

8つの州都で 水道局職員の能力を向上し 水道の普及を目指す

首都圏で水道の普及が進む一方、地方の給水状況は依然として深刻だ。JICAはPhnom Penhでの成果を生かして地方展開を図るため、プロジェクトのフェーズ2を07年5月に開始。引き続き北九州市水道局と連携し、地方8州都の水道局の能力向上に取り組んでいる。

Phnom Penh以外の都市の水道局は、鉱工業エネルギー省が管轄していることから、プロジェクトでは、同省水道部の機能を強化するとともに、8州都の水道局職員に対して、浄水場の運転・維持管理や配水施設管理の研修、実地訓練(OJT)を行っている。また、フェー



シェムリアップ市内で、配水管敷設替工事について協議をする北九州市水道局の森木茂広専門家(左)とシェムリアップ水道公社職員

何事にもとても熱心です。水の安全性に対する認識も高い。施設が整備され、優秀な人材がいる。さまざまな条件が重なり、プロジェクトも円滑に進み、施設の維持管理、水質管理などの技術を高めることができました」と話す。

チャン総裁も「日本人の専門家は、同僚とシリアという点で親近感がある。細やかな指



子どもたちに、水の安全性について説明するシェムリアップ水道公社の職員

ズ1で育成されたPhnom Penh水道公社職員を、研修の指導者に起用。「私たちの次の役割は、資金・技術の両面から、地方の水道局をサポートしていくこと」とチャン総裁は強調する。

チーフアドバイザーは北九州市水道局の木山聡さん。フェーズ1でも、専門家として電気系統の指導を担当した。現在は各州都を回り、水道局職員の技術指導に精を出す。「まずは事故を起こさないよう、機械を適切に扱う技術を身に付けることが大切です」。シェムリアップ水道公社のソム・クンティア総裁は、「人材育成は時間がかかる仕事。JICAの支援を受けながら、持続的に取り組んでいきたい」と決意を語る。

8州都の一つ、世界遺産・アンコール遺跡群を有し、年間200万もの観光客が訪れる

導能力も素晴らしい」と評価する。今後、円借款によるニロート地区の浄水場建設が予定されており、近年、急速に拡大するPhnom Penh市周辺地域の水需要への対応が期待されている。

08年、Phnom Penhの無収水率^{※1}は6%にまで低下した。これは一般的な先進国より低い数値だ。1日10時間しか供給できていなかった



シェムリアップ浄水場の給水塔には、カンボジアと日本の友好の証として、両国の国旗が描かれている



水を運ぶ子どもたち。水道がない家庭では、子どもが水くみを担う

シムリアップ。かつては「水の都」とも呼ばれていたが、03年時点の給水率は10%にすぎなかった。この観光都市の浄水場も、日本の支援で整備された。給水区域は市街地の7地区のうち4つ。06年に浄水場が完成してから給水率は6倍近くアップした。「井戸水には鉄分が多く含まれていて、洗濯すると服が変色することもありました。水道水は、最初は塩素のにおいが少し気になったけど、今は毎日きれいな水が使えて幸せです」とスラ・クラム地区の住民サム・フォンさんはうれしそうだ。

「シムリアップの水源は地下水。浄水場で処理した後の水は、飲んでもまったく支障がない」と木山さん。確かに、浄水場で口にしたことで、の水には少し甘みがあった。しかし近年の急速な人口・観光客の増加により、水源不足が深刻になっているという。地盤沈下の懸念から、地下水の開発については慎重に検討すべきとの声もある。

サラ・カムラエウク地区の地区長サム・ラソンさんは、「この地区の約4200世帯のうち、水道を使えるのは1000世帯程度。住民の生活・健康改善のために、一刻も早く、全世界に水道が引かれてほしい」と訴える。

カンボジアをはじめ、開発途上国には安全な水を利用できない人がまだまだ多い。木山さんは「支援に『これで終わり』という地点はない。これからも現地の人たちと二人三脚でやっていきたい」と意欲を見せる。

「水は人の生命をつなぐ貴重な資源だ。国民に安全な水が行き渡ることが私の夢」とチャン総裁。その夢の実現に日本の技術が生かされ、カンボジアの人々の手で、生命の水が広がっていくことを期待したい。

た水も、24時間利用可能になった。総裁補佐のチェア・ビソットさんは「今後は、貧困地域への水道普及に力を入れたい」と意気込む。水道公社は、貧困地域の住民に対し、収入に応じて接続料を優遇するシステムを導入。冒頭のクモング地区のソフィさんも、収入が1日3ドルのため、接続料の7割が免除されている。

※1 浄水場から送られた水の全量に対して、漏水や盗水によって失われる比率。